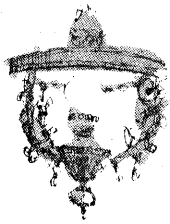

ちえおくれの幼児と幼稚園

水田順子

「あなたの幼稚園には、目や耳の不自由な子はいますか？　身体の不自由な子はいますか？　ちえのおくれた子はいますか？」考えてごらんになったことがあるでしょうか。軽い麻痺のある子、軽いちえおくれの子がいるとおっしゃる方は、少しはあるでしょう。しかし、大部分の方は、いませんと答えられるのではないでしょうか。

精薄児の出現率は、大体五％といわれていますから、肢体不自由児、盲児、聾児など、いわゆる欠陥児の出現率は、合わせれば少なくとも、七～八％位にはなります。すなわち、園児数が一〇〇人の幼稚園には、七人か八人位は、何らかの欠陥を持つ子どもがいるのは、あたりまえだということです。それが、一人もいないというのは、むしろ、奇妙なことではありませんか？

八百屋に行けば、まがったキュウリや、太すぎるキュウリや、細すぎるキュウリがあります。それが自然の姿なのだとは思いませんか？　スーパー・マーケットに行くと、大きさも太さも揃ったキュウリが、きれいに包装されて出ています。形の悪いものは、どうなってしまったのでしょう。ただ、まがっているというだけで、ゴミ箱にすてられてしまうのでしょうか。形の悪いトマトが、ポンポンとはじき出されて、「〇〇は完全な、選ばれたトマトだけで作ったトマトケチャップです」というテレビのコマーシャルを見て、あるサリドマイド児が「ボクはあんなのは嫌いだ」といったという話をきいたことがあります。胸のしめつけられるような思いです。

大きいのも小さいのも、太いのも細いのも、きれいな形のものも、そうでないものも、完全なものも、多少どこか不完全なものも、いろいろまざりあっているのが、ありのままの、あたりまえ

の姿なのです。子どもの世界も同じだと思います。身体の欠陥を持った子どもやちえのおくれた子どもも、共にいるのが自然な姿なのではないでしょうか。少し意地の悪いいい方をするなら、そういう子どもの一人もいない幼稚園は、スーパー・マーケットの包装されたキュウリのように、見場にとらわれた商品みたいだといえましょう。しかし、これに対しては、こんな意見が出るのではないでしょうか。

第一は、「希望する人があればいつでも入れるつもりでいるのに、応募者がいません」という意見。

第二は、「特殊な子どもは、その子どもに適した特殊な教育方法があるはずだから、普通の幼稚園で教育することは、かえってよくないことだ」という反論。

第三は、「理想としては正しいかもしれないが、実際にやることはむずかしい。また、やって見たが、トラブルが多くて困った」という意見。

第一の意見から考えてみましょう。応募者がいないとおっしゃる幼稚園では、入園テストを行なっていませんか？　何も成績の良し悪しを見るのではなくて、ただ子どもを知るためにするのだといわれても、ちえおくれやその他の欠陥を持つ親たちは、そうは受け取りません。テストをされるというだけで、もうだめかもしれないと思い、人数の関係で、毎年入れない子どもが出ていれば、絶対にうちの子なんか入れてもらえないと思い込んでしまうのです。応募するまでもないとあきらめてしまいます。全く、なぜ入園テストをするのでしょう。子どもを知るためだったら、そんな短時間でできるわけがありません。入園してからゆっくりと子どもを知ればよいのです。もし入園させるにふさわしくない子どもを見つけ出すためだったら、それは形の悪いトマトを放り出すようなもので、少なくとも幼児教育者として、悲しむべきことではないでしょうか。いろいろな問題を持つ子どもの応募を無言のうちにやめさせているのは、幼稚園自身ではないでしょうか。

第二の意見については、ちえ遅れの幼児の保育にずっと携ってきた者として、これらの子どもたちは、決して特殊な子どもではないし、したがって特殊な教育方法があるのではない、幼児期にふさわしい生活を、他の幼児と同じように与えることが必要なのだ、ということができます。

暗闇の中を手さぐりでそろそろ歩いているうちに、ほんのりと明るくなり、次第に夜が明けて、あたりがはっきりと見えてくるような、そんな経験を、幼児期にするのではないでしょうか。たとえば、今まで、お風呂に入れてもらったり、手を洗ってもらうためだけにあった水、お母さんに属していた水が、幼稚園では自由に使うことができて、いつまでも流れていくのを見て楽しんだり、砂場に満たして池を作ったり、ホースでまいたりすることが

できます。そして、水はだんだん子どもにとって親しいものになり、水は子どもの新しい世界になります。幼稚園には大きな紙やたくさんの絵の具があります。何となくふれてみると、赤い線ができてびっくりします。もう一度やってみると絵の具がたれて、まるで競争しているように見えました。おもしろくなって、どんどん描いてみます。ワクワクするようなうれしさが、身体いっぱいに込み上げてきます。そうして、描くということも、子どもの新しい世界になっていくのです。ブランコや三輪車の取り合いは、白いモヤの向こうにぼんやりと見えていた他の子どもの姿を、はっきりとした光の中で見せてくれることなのでしょう。

幼稚園は、子どものために用意された子どもの探検場所のようなものです。子どもは、そこでは自由に好きなものにふれ、好きなことをためして、自分のまわりの新しい世界に足を踏み入れ、自分自身の夜明けを感じることができるのです。ちえのおくれた子どもであってもそうでなくても、また何らかの欠陥を持った子どもであっても、皆等しく、子どもは子どものために用意された場所で、十分に一歩一歩をためし、たしかめながら成長していくことが必要であり、その用意をするのがおとなの役目なのではないでしょうか。

幼児教育とは、子どもの自然に伸びる力に手を借すことであるといわれています。どの子どもにも、自然に伸びる力はそなわっています。その子どもがおくれているからという理由で、また欠陥があるからという理由で、その子どもが自然に伸びる力を持っている時期に、それに手を貸すことを躊躇したり、恐れたりする必要はないと思うのです。子どもは各々その子どもなりに、一歩ずつ自分の世界を開いていくのですから、どんな子どもに対しても、その子どもなりに見守って、その子どもが必要な時に手を貸すことができればよいのではないでしょうか。子どもの持っている欠陥に対しては、将来、それがハンディキャップになることが少ないように、治療なり訓練なりが必要な場合は、もちろんありますが、その治療や訓練は、子どもにとってはほんの一部分であって、他の子どもと変わらない、幼児らしい生活をすることが、その子どもの人としての成長に必要なことであると思います。

第三の意見について考えてみましょう。実際に障害を持った子どもを、クラスの中に入れて保育しておられる先生方を知っています。そして頭の下がるようなすばらしい実践をされている先生も、多くあります。しかし、一人の先生の努力だけでは、どうにもならない——園長や、他のクラスの先生方、父兄の理解などもなければ、結局どうにもならない場合が多いことも知っています。

幼稚園全体として、障害のある子どもでもいっしょにやっていくことは何でもないことだという理解があれば、ほんとうに何でもないことであるのに、そうでなければ、担任の先生は子ども

との間の板ばさみになって、とても大変です。しかし、それでも、いろいろな子どもがいてあたりまえなんだ、ちえおくれの子でも、その子なりにそれでよいのだということを皆にわからせることができるのは、実際に保育をしている先生以外にはないのです。

ある幼稚園では、リトミックがとてもさかんで、クラスごとにできを競う風潮がありました。一人のちえおくれの子どものいるクラスを受け持った先生は、先生個人としてはとてもよく子どもを受け入れて努力をしていましたが、その子どものために、リトミックがそろわないといって、父兄から非難を受けたのです。リトミックは、クラス全員が間違えずにそろうことが大切なことではないということくらい先生は知っていましたが、父兄の非難に敢然としているには、とても勇気がいると語っていました。

またある幼稚園では、あまり部屋が泥だらけなので、どうしたのかと尋ねると、「この辺はアパートに住んでいる子どもが多くて、幼稚園に来ると、一日中泥んこ遊びをするのです。それでもたりなくて、部屋の中にまで持ち込むのですよ。でも、この子たちには、今、これが一番必要なのだから、やらせておくのです。でも、二学期ごろになると、自然に別の遊びに移りますからお部屋もきれいになりますよ」と笑っていました。こういう理解をされる幼稚園では、ちえおくれの子どもも自然に受け入れられています。

例をあげだせばきりがないぐらいありますが、このふたつの例でもわかるように、子どもをどう理解しどう受け入れるかで、一方は困ったと思い、一方は何でもないことだと思うのです。困ったこと、困った子ども、はみ出してしまう子——それらは子どもに問題があるのか、それとも、私たち自身の視点に問題があるのかを、ふり返ってみる必要があるのではないでしょうか。

クラスとしてのまとまり、クラスとしての生活を重んじるあまり、うっかり一人一人の子どもの気持ちを忘れてしまうと、そこからはずれる子どもは、困った子と思ってしまうのではないでしょうか。逆に、一人一人の子どもが、幼稚園の生活の中で、十分に満足して、のびのびとたのしむことができるように先生が手だすけをすれば、自然にクラスとしての調和が生まれてきます。ちえおくれの子どもでも、その子どもなりにその中で調和していくことができます。そして、そのようにたとえ欠陥を持った子どもでも、何でもなく自然に皆の中で交わっているさまを見て、まわりの先生や父兄も、納得できるのでしょう。

ちえおくれの子どもと幼稚園の問題は、子どもの方の側からではなく、幼稚園の側から考えられるべき問題です。もし、ちえおくれの子どもを受け入れることがとても困難であるとしたら、子どもが悪いと考えるのでなく、子どもをはじき出そうとしている保育を、はたしてこれでよいのか、ふり返って考える必要があるのではないでしょうか。

（愛育研究所）